

4 宗教の本質について特定の教義を重ね合わせた上で伝えるべきか、それとも教義の特徴を可能な限り差し引き、客観的に伝えるべきか。あるいは融合して伝えるべきか。

これらを、図として資料展開した(図に関しては省略)。また、現在も行われているので、結論の代わりにメディア・他の教育(研究)機関との連携についても若干触れた次第である。

宗教的問い「何」・「何事」考

—— 宗教教育方法のデザイン ——

小山 一乗

一 疑問詞「何」は研究の母という。本稿の目的は、(一)拙前稿「何・不可思議・何事・畏敬の念——宗教教育批判論議の思考方法批判」(日本仏教教育学研究、七、平成二十一年)で取り扱った「宗教的問い「何事」考」での疑問詞「何」の姿態を再考し、(二)数の単位の、一：億・兆：恒河沙：不可思議、無量大数(吉田光由『塵劫記』)に人知の限界的表現を看取し、(三)小学校の道徳の「内容」中の用語「不思議」(中学年)、「人間の力を超えた」(高学年)等の教育方法のデザイン(走路)構想の「原、みなもと」を得るにある。不思議認識へ連関する疑問詞「何」の「personal」な発達・地域分布研究には、堀七蔵『児童生徒の疑問の調査研究』(福村書店、一九六三年)が詳しい。

二 疑問詞「何」は、文字学的には、「字訓」になう・なに・いづく。「甲骨金文」、「説文」、「金文系考」。金文に類に作る形があり、顧みて誰何(すいか)する形。「白川静『字通』」とみえる。「誰何」とは「誰か」と声をかけて名を

問いただすこと。呼びとがめること。】(『広辞苑』)とみえる。「字」の命名を受けた人の子が、ある時空で、とにかく【何もかがそこにいる(something there)】といえるような何らかの知覚を生起し、いかなる得體であるかを問う姿態が「何」であり、定義不能事態は適応機制にも波及する。

三 「何の木の花とはしらず匂いかな」(芭蕉)を引く。この「何」の生起文脈は複雑で根深い。半僧半俗姿の過客の芭蕉の「何」は西行の「何事」と共感し、神仏の習合を奇しくも問う「何」である。西行没後五百年目の『笈の小文』の旅の芭蕉は、西行への追慕の念篤く、「西上人のなみだのあとをしたひ」、かつ、「世人が伝えるその和歌にこもる衆生の切ない心根を汲んで、みごとに句作を示した」(岡野弘彦『日本の古社 伊勢神宮』平成十五年、淡交社)。朝熊岳・金剛證寺を想起する。

四 世人が伝える西行の作とされる歌を引く。「道中伊勢音頭(敬神の歌)」(畑嘉聞作)に西行の歌が編み込まれていることには一顧しておきたい。

何事のおはしますかは(をば)しらねども

かたじけなさに(の)なみだこぼるる

西行研究者(坂口博規、元駒澤大学教授)によれば、作者論議の余地なしとしない。今は、世人が伝えるこの歌の宗教的疑問態「何事」指定に至る脳の生理過程・軌跡を仮説的に素描してみたい。思考実験による「course・走路」の架設である。

素朴で純粹で個人的な問いの「何(what)」が生起する。得體を定義することが不可能という事態に直面する。それでもとにかく「或る何だか」の存在を感じるのには禁じ得ない。「注意

深く観察する」、または、「聖なる或る何だかと結ぶ」ことをおもうにしても、思議不能。定義不能。とにかく「何事」としか表現のしようがない。「思議しようとして、思議尽くせず」、「思議不可能事態を甘受し」、それでも「その事態を言語表現せんとする次元から」、「不可思議」と措定し、「不可思議事態をメタ的に思議する」その挙げ句が「何事 (whatness) …」の詠歌中の「何事」に結果した。ここに、「何」から「何事」、「what」から「whatness」への展開の原を穿つ。

五 禅籍に、「この道は、恁歴はこれ不疑なり、不会なるがゆゑに。是什麼物なるがゆゑに、万物、まことにならず什麼物なると参究すべし。什麼物は、疑著にはあらざるなり、恁歴来なり。」(『正法眼藏 恁歴』岩波文庫、上、四三一—四三二頁)とする。疑問詞「何」を究明し「何の字は邊際なき義也」との示も知られる。疑問態と坐とを止揚する。

学校における瞑想実践

——小学校・中学校での実践とその評価——

得丸 定子

子どもも大人もストレス過剰で疲れがちな昨今である。禅瞑想から開発された宗教性のないマインドフルネスストレス低減プログラムは生理・心理・脳科学面からの研究が進み、世界的な学術雑誌では、子どもとマインドフルネスに関する報告は膨大である。しかし、国内雑誌では、現時点二報程度で今後の研究が期待される領域である。ゆえに、本報告は子どもを対象とした簡易な瞑想実践とその評価を報告する。

【目的】児童・生徒はまだ自分の生活体験からストレス対処法を見出すことは難しく、またストレス反応をうまく大人にも伝えられず、我慢しているという実態が報告されている。この現状下、子どもへのストレス低減教育の実践は少なく、しかも精神的な取り組みが主流である。ゆえに、本研究は「生きる力」育成の一環として、呼吸法を中心とした簡単な瞑想を実践し、学校教育、日常生活への導入を見据えてその基礎的知見を得ることを目的とした。

【方法】小学生対象者は高山市内の公立小学校三年生二十二名、期間平成二十一年一〇月下旬一か月、瞑想種類は呼吸法とボディスキヤン、時間帯は朝五〜一〇分、回数は週二〜三回行った。評価はアンケート調査。内容は対象校教員の要望を重視して設定し、①属性と生活習慣、②独立協調性、③学習志向性、④友人関係、⑤学習意欲、⑥自由記述の計二十四項目(属性以外は五段階尺度)。中学生は上越市内の公立中学校一年生三十二名。期間は平成二十三年五月に一回のみ。瞑想は呼吸法、ボディスキヤンとマインドフルリスニング。評価はアンケート。内容は「いやなこと」についてとストレスコーピング(積極的対処、サポート希求、認知的対処)尺度。統計処理は単純集計、分散分析、t/サイン検定。

【結果及び考察】小学生への結果では、②独立協調性の中の「他者重視傾向」で有意傾向がみられた(t検定 $p<0.05$)。このことは独立心が高まる傾向になったと解釈できる。③学習志向尺度の中の「協同思考」について、サイン検定では瞑想一か月後、共同思考の逆の「助けあいながら勉強しなくなった」